

# 『伊勢物語』 三十九・四十・四十一段と源順

## ——『篁物語』 第Ⅰ部・第Ⅱ部共通の二典拠章段として——

安部 清哉

### 論文要旨

本稿は、源順が『伊勢物語』の三十九、四十、四十一段を読み、そこに着想を得て、『篁物語』に部分的に組み込んだらしいこと、少なくとも、現『篁物語』の構想の源泉(典拠)の一部が『伊勢物語』のこれら三つの章段にあるらしいことを先行研究\*を踏まえて述べる(\*四十段に対する藤田徳太郎(1930)および後藤丹治(1936)の指摘)。併せて、『伊勢物語』のこれら三章段に関連する現『篁物語』の描写は、いずれも、『篁物語』の初期段階の原作箇所と推定される部分というよりも、第二段階構想(ないし後補)箇所と思われるところにのみ現れていること、にも言及する。

本稿は、前稿・安部(2017)での調査過程で、『伊勢物語』にて「緑の衣」(源順語彙)の類似表現である「緑衫ろくさうの上うへの衣きぬ」が使われている四十一段を考察する過程で着眼したものである。その2つ前の三十九段が『篁物語』の原作者の源順の祖父・源至の歌説話であることに気付き、間にある四十段をも検討する過程で、藤田徳太郎(1930)、後藤丹治(1936)の両氏が『篁物語』と『伊勢物語』との関連性を、既に80年以上前に指摘していたところまでたどりつき、三十九段・四十一段との連環を見出すこととなったものである。

キーワード 『伊勢物語』三十九段・四十段・四十一段、源順、『篁

物語』、典拠、古篁、現篁

### 【目次】

- 1 はじめに
- 2 本稿の目的
- 3 四十一段と源順と『篁物語』——「緑衫ろくさうの上うへの衣きぬ」および男二人の身分の対比——
- 4 三十九段と源順と『篁物語』——祖父・源至と「消ゆる物とも我は知らずな」
- 5 四十段と『篁物語』——実子恋愛妨害譚と末尾表現「昔の若人わかひとは、今の翁、まさにしなむや。」
- 6 『伊勢物語』三十九・四十・四十一段の『篁物語』の中での分散箇所
- 7 『篁物語』「緑の衣」と『伊勢物語』「緑衫ろくさうの上うへの衣きぬ」
- 8 『篁物語』の末尾段落と『伊勢物語』四十段の末尾表現
- 9 むすびとして

注・参考文献

【補記1】『伊勢物語』との関連についての『篁物語』の研究史

【補記2】Episode II (エピソード2)

## 1 はじめに

本稿執筆者は、安部清哉(2017:3)「原『篁物語』の作者・成立年と源順および河原院歌壇沈淪歌人群の長歌・和歌——九六一年から九八〇年頃か——」『学習院大学文学部研究年報』63 (pp.51-97) (以下、前稿と略記)にて、『篁物語』のキーワードでもある「緑の衣」およびその類義語彙を調査し、原『篁物語』の作者は、源順であると結論付けた。<sup>1)</sup>

そこでは、六位の朝衣を意味する「緑の衣(きぬ・ころも)」と、その類似表現が共通して持っている「沈淪の嘆き」(出世上不遇であることの嘆き)のイメージを明らかにしていくことで源順に至り付いた。その際、先行して使われている類似表現である「緑衫の上の衣」『伊勢物語』四十一段については、次のように保留としていた。なお、これら以前に六位を表わして「緑衫の上の衣」(『伊勢物語』『色葉字類抄』ほか、日国による)、また、「緑なる袖」(『後撰集』82c)がより古い事例として見られる。沈淪の嘆きはこれらにはまだ認められないので機会を改める。

本稿は、その保留していた『伊勢物語』の用例を検討したものである。原作者を源順と見た視点で考察を進めていく。

## 2 本稿の目的

梨壺の五人の一人である源順は、時代的に見て、おそらく『伊勢物語』を読んでいたのであろうと推察される。

『伊勢物語』において、「緑衫の上の衣」が使われている四十一段を読んでみると、「緑衫の上の衣」には確かに、前稿で指摘したような「緑の衣」語彙に見られる「沈淪の嘆き」などのマイナスのイメージは認められない。しかし、その語句が『篁物語』と同じように六位の官衣を表すというだけでなく、『篁物語』との間に、物語上の共通点があることに気付く。

『伊勢』の章段配列は、冒頭の東下り章段もそうであるように、前後に多少関連のある話が並ぶこともある。そこで、前後の章段も何気なく読んでみた。すると、2つ前の三十九段は、前稿で『篁物語』の原作者と推定した源順の祖父である源至が主人公となっている。四十一段における共通点と照らし合わせると、ちょっと奇妙な関連性を感じた。四十一段には、源順自身と同じ六位の身分の男性が登場し、三十九段が祖父であるなら、四十段は、源順の父にも関係する章段ということはないだろうか？

そんな当て推量で、改めて注意を払いながら読んでみたが、源順やその親族と関わる材料は何もなかった。ところが、一方で四十段の歌物語の話の展開には、ある種の既視感のような奇妙な一致を感じ

じることになる。何か、どこかが、『篁物語』に似てはいないか？ それら三つの章段と『篁物語』との類似点、共通点を改めて検討し、一方でちょうど前後して、『篁物語』の作者説の研究史を編むべく先行研究をたどっている過程で、『伊勢』四十段に関する先行研究での指摘二つを見出すこととなった。

四十一段は「六位の官衣譚」、三十九段は順の祖父が主人公である「亡くなった女の葬送譚」、そしてそれらの間の四十段は『篁物語』との類似テーマおよび類似表現を持つ「実子の恋愛妨害譚」とでも言える章段である（三十九段は実在の皇女・崇子の名が出るのでこの段のみ歌説話と呼んでおく）。その三つが、源順と関わって並んでいることになる。それらの三つの章段の配置と内容的類似性関連性は、偶然のものとは思われなかった。以下、それらについて、気付いた順番に解説していくことにしてみたい。

なお、以下では、『篁物語』を『篁』、『伊勢物語』を『伊勢』と略記し、安部（2017）を時に前稿と略記する。また、古典作品の本文の引用部分等では、本稿執筆者による補注的記載は「」括弧にて示すことがある。引用する『篁物語』『伊勢物語』の本文は岩波（旧）日本古典文学大系本により、『伊勢物語』の三十九、四十、四十一段の本文は、参考資料として本稿末尾に掲載しておく。

### 3 四十一段と源順と『篁物語』——六位の朝衣「緑衫の上の衣」および男二人の身分の対比——

四十一段はおおよそ次のような話である（原文は本稿末尾参照）。

女朋輩二人がいた。女それぞれの相手の男は、一人は「あて（貴）なる男」、もう一方は「いやしき男のまづしき」男であった。後者の女が、師走に、年越しの身仕度のためであろうか、自分の男の衣、おそらくは朝衣を洗ってあげた。ところが、慣れぬ洗い張りの仕事のため、破いてしまったという。それを聞いた「貴なる男」は我が女の大事な女友たちということもあるので、「武蔵野の」和歌の縁でもないが（その和歌を踏まえて）、紫のゆかりとの思いを込め、代わりの服として、「いときよらなる緑衫の上のきぬを見出でてやる」、即ち、見つけ出してきて贈り、次の一首を詠んだ。

紫の色こき時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける

ここでは、二組の男女と、異なる色の対比（緑衫と濃紫）と、身分の差異（高位と低位）が、一つのテーマということが出来る。「緑衫の上の衣」の衣の緑色と、「紫の色濃き（時）」も和歌で詠まれているので、「緑」（六位・いやしき男）と「濃紫」（貴なる男）

という、身分の異なる二人の男がテーマである、と見ることもできる。

ここでの「緑衫の上の衣」という語は、極めて注目される。なぜなら、六位の官衣を表す多くの語彙があるが（前稿参照）、「きぬ」で表現したものは、管見の限り中古の散文作品では、『伊勢』と『篁』しかないからである。また、「緑衫の上の衣」という語は、一方の男性の身分を象徴し、六位を意味する。四十段を読んだ源順は、この章段の六位の男には、ある種の共感を覚えつつ、この歌物語の二名の男を比較しつつ読んだことであろう。一人は、六位に長く留まった自分と同じ低い位の男として、一方では、それよりも、高い位の男性として、我が身と他が男とを並べながら読んだことであろう。なぜなら、源順は、長く六位にとどまり、散位の己が身を嘆いていたことが、多くの資料から明らかにされている。また、六位の「緑」色の官衣を何度もその和歌に詠み込んでいたのである（前稿参照）。

さて、四十段に使われた「緑衫の上の衣」の「上の衣」は「袍」を指す。「うへのきぬ」は「袍」の当時の訓読みである（『名義抄』、前稿参照）。所謂、六位を表す緑の朝位であるが、『伊勢』では、十世紀半ば以降の歌人たちが用いたような、「沈淪」の嘆きを象徴するような使われ方はしていない（前稿参照）。『伊勢』の時代ないしその作者は、この語句にはまだそのようなイメージをさほど強くは

持っていなかったことがうかがえる。

順は、『伊勢』を読んだ時、その「いやしき男のまづしき」が六位であることを「緑衫の上の衣」によって理解しただろう。登場こそしないが、衣が破れ、そして、衣をめぐんでもらうことになるその六位の男に、自分を重ね合わせたことであろう。長く六位にとどまり、己の散位を嘆いて歌にも詠み、詞書にも記し、漢文にも表し、漢詩にまでも作った源順自らを、その男の姿に、きつと重ね合わせたことであろう。その緑の袍は、その妻が「破り」てしまっていて、一層哀れさを誘う。

それとは対照的に、この章段に一首の和歌を詠んだもう一人の男の方は、身分が高く、「貴なる男」として描かれている。六位の「いやしき男のまづしき」男は、登場すらしていないだけに、そのコントラストはさらに際立つ。

出自のよい「貴なる男」は「色濃き」「紫」のイメージとしてその和歌に描かれる。「緑」（緑色の朝衣の身）の「野なる」（身分の高くない）「草木」（いやしき）と、対比されているのであるから、源順は、なおさら、己の低位をその「まづしき／いやしき男」に重ね合わせたことであろう。

ところで、そのような対比構造を意識した上で、一方の『篁物語』を見てみると、その第一部（いわゆる前半部の話）の「如月の初午に稲荷に詣りけり」（兵衛佐の稲荷詣横恋慕譚）の段落では、主人公・小野篁が大学の学生の身（多くは六位前後）であり、その恋敵

として登場する兵衛佐の方は「時の大納言の子」という身分である。身分上対照的に設定されていることに気付く。この兵衛佐の官位は不明であるが、六位程の学生と、一方で「貴なる」出自の男とを対比させる設定は、『伊勢』四十一段での設定と酷似していると思われるのである。

なお、この話が「十二月<sup>しほす</sup>」であることを、心にとめておいていただきたい。『篁物語』の第I部内の前半の方にある挿入的物語的章段とも言える「師走のもちごろ、月いとあかきに」段落は、なぜか突然に「師走」として設定されている。季節や月が記されているのはあわせて三ヶ所しかないその一つにあたる。

#### 4 三十九段と源順と『篁物語』——祖父・源至と

「消ゆる物とも我は知らずな」

『伊勢』三十九段は、源順の祖父である源至<sup>いひな</sup>にまつわる歌説話である。『伊勢』を読んだ源順は、自分の祖父の歌説話として、また、祖父の和歌への評が記載された章段としても、きつと心に留めたことであろう。その話のあらまはは次のようなものである。

「昔、西院の帝（淳和天皇）の第三皇子・崇子（たかいこ）の御葬送の夜に、その御殿の隣に住んでいた男が、葬送を見ようとと思って、女車に女と相乗りして出かけた。源至も御葬送を

拝みに来たところ、その女車に懸想をし、顔を見ようとして螢を入れた。女の顔を見られないようにと、相乗りしていたその男は「螢の日を消そうとしながら（「灯し消ちなむずるとて」）歌を詠んだ。それに至は、「灯火が消えても皇女様の魂が人（々）の心から消え去っているものとも、私は思いません。」という歌で皇女への気持ち詠んでかわした。天下の色好みの歌にしては「なほぞ」（平凡だ、一説には、やはり名に負うだけの歌だ）という出来であった。「至は（源）順の祖父である。」

次に、原文でその末尾部分を挙げておく。

【至の和歌】いとあはれ泣くぞ聞こゆる灯もし消ち 消ゆるものとも我れは知らずな

のとも我れは知らずな

天の下の色好みの歌にては、なほぞありける。

至は順がおほぢ（祖父）なり。みこの本意なし。

【和歌大意】とても悲しいあわれなことです。（しかし）

灯し火（皇女の命）が消えても、皇女様の魂が（人（人々）の）心から消え去ってゆくものとも、私には思えません。】

ところで、拙文・安部（2017）にて、『篁物語』（原『篁物語』）の作者を順と推定した。『篁物語』の主人公として登場する、兄・小野篁は、恋仲になる異腹の妹が死んだ後も妹を思い続け、その霊

と和歌を交わし、夜な夜な「語らひ」続ける。第Ⅱ部にても、時の右大臣の娘（三女）と結婚して将来を囑望される身になった後も、「妹のありし屋」に通い、妹の霊の歌を声に聞き涙する。第Ⅰ部・第Ⅱ部にて連続するその妹の亡霊説話部分は、所謂心靈譚として描かれている。

『篁』と『伊勢』の三十九段とは、至の歌も含め、特に同語や類似表現が見られるわけではない。しかし、至の和歌の下の句は注意が必要である。

「<sup>と</sup>灯し消ち 消ゆる物とは我は知らずな」

皇女「たかい子」の「おほん葬の夜」に、その御霊は「消え去っていくものとは、自分は思わない」と詠んでいるのである。亡くなった女性の魂の存在を信じるその思想は、『篁』の妹の亡霊譚の思想と共通していないだろうか。

この1点のみならば、『篁物語』との類似として挙げるには、極めてかすかなものだと思う。しかし、四十段、四十一段での類似点とこれらの章段の連続性、そして三十九段の場合には何よりも、順と関係がある祖父「至」の名がある章段なのである。それらのことを考慮すると、四十段・四十一段同様に、源順はこの三十九段から、<sup>〃</sup>思い続ける限りは消えない霊、<sup>〃</sup>というものについて、何らかの影響を受けている可能性は十分に考えられるのではないだろうか。少なくとも、そのような関連性を推定することがゆるされるように思われる。

## 5 四十段——実子恋愛妨害譚と末尾表現

「昔の若人<sup>わかうと</sup>は<sup>〃</sup>、今の翁、まさに、しなむや。」

さて、上記の三十九段と四十一段に挟まれた『伊勢』の四十段も、梨壺の五人でもある源順は読んでいたであろう。まして、祖父の章段である三十九段と、我が身にも、つまされる四十一段に挟まれた四十段には、何らかの関連性を感じたとしてもおかしくはない。むしろ、何かの縁<sup>えんじ</sup>を積極的に読み取ろうとしたかもしれない。例えば、祖父と自分の間であれば、四十段に父・<sup>こせら</sup>拳への影を探して読み取ろうとしたかもしれない。四十段の、「すける物思ひ」をする一途な「若人」に父のことを重ね、そこに何か面影や関連を見つけようという思いが多少なりとも生まれたのではないかと考えても、あながち想像し過ぎというほどでもないのではないだろうか。

源拳の伝記は、今日にはあまり多くは伝わっていない（神野藤昭夫（197203）に拳のことが最も詳しいか）。九三〇年没、順二十歳の時とされる。それゆえ、四十段と父・拳、また祖父・至とのつながりを示唆するような材料は、今のところ何も見出せない。しかし、祖父の章段と自分にも似た身分の男の章段に挟まれたこの四十段には特別な思いを寄せて読んだであろうことは、想像に難くない。それらのことを考えていた安部（2011）の後、この『伊勢』四十段の解釈を探っている過程で、『篁物語』の研究の方に、次のような興

味深い指摘を見付けることとなった。

それは、『篁物語』の結びの一句「今の人まさ(生)に大学のせう(生)を、む(たし)こに取る大臣(たし)もあらむや」に対する古い注釈史に遡る。

まず、『伊勢』四十段の結びの語句「今の翁まさ(生)に死なむや」が『篁』の末尾と類似するという藤田徳太郎(1936)の注記である。さらに、その一句だけでなく、「両書の交渉」「構想上の一致」を指摘する興味深い解釈が、これも80年以上も前、この『篁物語』を最初に学界に再発見された後藤丹治(1936)によってなされている。これを見出すこととなった。『伊勢』の四十段と『篁物語』との類似に関するこの2つの指摘は、管見の限りでは、その後、ほぼ誰にも顧みられることもなく研究史にも跡を留めること薄く、完全に埋没してきたようである。これらを改めてたどってみたい。

藤田徳太郎(1936)は、『篁』の書誌紹介記事に続いて、冒頭と末尾の本文に、諸写本の異同を頭注で示し、中間部の梗概を挿入した簡略な作品紹介である(付録として「実録物語」の分類にて掲載されている)。その頭注はほとんどすべて諸本との校異(「一本」形式、17箇所)が中心である中に、唯一、「今の人まさ(生)に云々」部に次の注記を加えている。

今の人まさ(生)に云々——「今の翁まさ(生)に死なんやは」(伊勢物語) 注記は簡明でこれだけである。この藤田氏のこの略注本を、その後の『篁』の研究史において、研究書・論文中に紹介しているものは、管見の限りいまだ見出していない。本稿執筆者も、唯一、次の

後藤(1936)を見るまでは、注のあることを知らずにいた。

この藤田氏の指摘に注目したのが、6年後の後藤(1936)である。藤田氏の指摘を紹介した後、次のように記している。

「伊勢物語のこの文辭が篁物語の右の句【引用注：『伊勢』末尾】に連絡を持つことは、用語句法の一致から認容される。なおくはしく云ふならば「む(たし)かしのわか人はさるすける物思ひをなんしける。いまのおきなまさ(生)にしなむや」といふこの伊勢の文句は同書四十段の結びの詞として書かれたものであり、また今と昔とを対照したものである点に於て、篁物語の「いまの人まさ(生)に大がくのせうを云々」と事態の同じきものがあるのを見るのであつて、さういふ理由からも両書の交渉を推定することが出来よう(中略)。」後藤(1936)

後藤氏は、「今と昔とを対照したものである点」の一致を重視して両書の「連絡」を認め、その点のみでも、「両書の交渉を推定することが出来よう」とした。さらに、右に続けて分析を一歩進め、次のように新たな解釈を追加している。

「だが、私の考(考)では伊勢物語第四十段は単にこの結びの詞のみでなく、説話全体の上から見ても篁物語に共通点があるのではあるまいかと思ふ。」(圈点原文、傍線引用者) として、次の諸点を挙げる。

「相愛の男女の伸らひを親が割くこと、親が女を遂ひ失ふことは篁物語の構想とほゞ同一であり、男が悲しみの余り絶え入る

ことは篁物語の女が悶死する件と類似してゐる。」

そこに挙げられた「共通点」は、藤田氏の指摘する末尾語句の一致(4)を含め、次の4点である。

- 1) 「相愛の男女の仲らひを親が割くこと、」
- 2) 「親が女を遂ひ失ふことは篁物語の構想とほゞ同じであり、」  
(『伊勢』では息子の女恋人を追い出し、『篁』では兄・篁を遠ざける)

- 3) 「男【本稿執筆者注・息子】が悲しみの余り絶え入ることは篁物語の女が悶死する件と類似してゐる。」(但し、『伊勢』の男息子は蘇生するが、『篁』での娘(妹)は息絶えて霊として黄泉帰る(蘇る)。

4) 「結びの詞の上に両書の交渉の存することが明らかである」  
そして、次のように結んでいる(上記、1)〜3)を指摘した後に続けて)。

「勿論たゞこれだけならば相互に関係があるとは断定が出来ぬかも知れぬが、既に結びの詞の上に両書の交渉の存するところが明らかである以上、こゝに構想上の一致を考定するのも強ちに不穩当ではないと思ふ。」(傍線引用者)

「構想上の一致を考定」できる、と見たこの指摘は注目される。

確かに両書と比較すると、これらの共通点は偶然の類似という範囲

を超えたものである。そして、改めてこの二書を見比べて行くと、これらの4点以外にも新たに次のような、「構成上の一致」および類似の表現・語句を指摘できる(両書の設定の相異なる部分を、『伊勢』／『篁』のように／の前後にて示す)。

- ① (親が無理やり引き離すが) 子供(息子／妹)は、まだ、若いため(親がかりで／年が若くて)、手立てがなく(親にあらがったり思うように振る舞ったりできず／相談したりできる人もなく)、どうすることもできない。

『伊勢』＝「人の子なれば、まだ心勢こころせひなかりければ、留とどむる勢いきほひなし。(女も卑しければ、すまふ力なし。)」

『篁』＝「まだいと若くて、至りたべき人もなく、わびければ、ともかくもえせで」

- ② (女あるいは娘を、手ずから) 引き連れて(二人を) 引き離す。

『伊勢』＝「(親は女を) 率て出でて去ぬ。」

『篁』＝「(女親は娘を) 手を取りて、引きもてゆきて、部屋にこめてけり。」

- ③ (『伊勢』の息子／『篁』の妹が) 歌を詠んですぐに絶命する。

- ④ (死んだのち) 親があわてふためく。

『伊勢』＝「親あはてにけり。」

『篁』＝「(親) まじお出で」

- ⑤ 晩がたに(＝夕を過ぎた後の夜の時間に) なってからよみが



える（時間帯の一致）。

『伊勢』「またの日の戌の時ばかりに」息子が蘇生する。

『篁』「その日のようさり」妹は霊となって黄泉帰る。

参考まで、『篁』における妹が死んで親があわてる場面を次に挙げておく（『伊勢』四十段全文は本稿末尾参照）。

● 『篁』における娘（妹）の死と親のあわてる場面  
消えはてて身こそは灰になりはてめ夢の魂君にあひそへ《妹の歌》

返し、

魂は身をかすめずほのかにて君まじりなばなにかはせん

《兄・篁の歌》

とて、よろづのことを言ひて泣けど、答へせずなりにければ、  
「死ぬ」とて『篁が』泣き騒げば、  
「親は」聲を聞きて、ときあけて見れば、  
絶へ入るけしきを見て、  
「親は」まどろ出て、  
ほかの家に去にけり。親出でてのちに、

これらのうち、①は心配する親に対する子供のありがちな境遇であり、③も、歌物語としてみれば（『篁』は『小野篁集』という別名を持つ）ある程度、類型化されているような展開ではあろう。④も親があわてるのは道理であるから、これら①③④の共通性は、こ

のような実子恋愛妨害譚であればむしろ類似してくるのが当然でもあろう点かもしれない。しかし、このような類似点がさらに5点とも、表現上も近い言葉で『篁』で描出されているということが、重要な点であると考えられる。

そして、後藤氏の指摘にこれらも併せて総合的に解釈するならば、後藤氏の指摘したように、「構成上の一致」はもはや否定できないレベルと見なすことができるのではなからうか。

ところで、この『伊勢』四十段と一致する構想の箇所は、『篁』では、第一部の後半部、妹が懐妊したことが知られた後の場面、「か、ることを、母おと、聞き給ひて、ものもの給はで（略）、手を取りて、引きもてゆきて、部屋にこめてけり。」から、妹の霊が現れて夜明けに消えていく、「歌」といふ程に、夜のあけにければ、なし。」までの段落の間と、第二部の末尾の「今の人、まさに大学のせうを、むこに取る大臣だじもあらむや。」の語句の部分の2箇所に分れている。このことは注意しておく必要がある。なぜなら、これまで、第一部と第二部の成立時期ないし原作者が、異なる可能性が考えられてきているからである。

従来の成立説で、成立時期あるいは作者が別とも見られてきた箇所が、共に『伊勢』四十段を踏まえているとなると、別々の作者が同じ四十段から「構想」を得たとは、極めて考え難くなる。少なくとも同一作者が、四十段を、その2箇所のための構想の典拠材料の一つとして、「当初から（あるいはある段階で既に）組み込んで

いた」と考えるのが、まずは穏当と思われるからである。第Ⅰ部の執筆と同時期に第Ⅱ部末尾を執筆していなくとも、少なくとも、四十段中の材料は、第Ⅰ部での一致箇所構想と同じ時期に、第Ⅱ部用としても当初から念頭に置かれていたということになる。

もちろん、まったく別の作者が使用した可能性がゼロではないだろうし、原作者が何かの事情で典拠とした材料を周囲の関係者に漏らしていた故に別の作者が利用したという可能性がゼロということにもならない。また、原作者が第Ⅰ部完成後に時間を置いて第Ⅱ部を書いた時に、改めて『伊勢』の末尾表現に注目してそれを利用した可能性も一応考えることはできるかもしれない。しかし、それは極めて稀であるか、やや無理がある想定か、敢えて数学的に可能性を列挙するための選択肢のようなもの、と言えるように思われるのである。

つまり、第Ⅰ部の後半の終りに近い段落(娘の幽閉場面まで)の構想段階か(最終段落には、このあとの「親は捨てて去にければ」があり、その前の段落になる)、あるいはその執筆からさほど隔てていない時期において、既に、第Ⅱ部最後の段落(第3段落部)の末尾表現は、原作者の材料の中にあつた、と考えられることになる。『伊勢』四十段との関連がある部分が、第Ⅰ部と第Ⅱ部とにまたがっている、というこの事実は、『篁物語』の形成を考える上で、あらたな材料を提供していることになる。

## 6 『伊勢物語』三十九・四十・四十一段の

### 『篁物語』の中の分散箇所

3～5節まで『伊勢』の三つの章段と『篁』とを比較してきた。次に、『篁』の中で、これら三章段の内容と関わる箇所がどのあたりに分散しているかをもう少し詳しく検討してみたい。

(1) 三十九段の和歌における、「魂」は「消ゆる物とも我は知らずな」という発想は、妹の亡霊譚の部分に投影していると見なせる。妹の亡霊譚は、第Ⅰ部と第Ⅱ部とに現れるが、直接には第Ⅰ部のみに影響し、第Ⅱ部のそれは第Ⅰ部の設定を受けて作られただけとみなすこともできようか。

(2) 四十段における構想と末尾表現との一致箇所は、まず構想的類似は、母親が妹を篁から引き離して部屋に籠めた部分から死んで霊となって和歌を詠み交わすまでの第Ⅰ部後半にある段落との一致と見なすことができる。末尾部分との類似表現は、第Ⅱ部第三段落末尾の一部(最末尾はさらに二文分ある)との一致である。

(3) 四十一段における身分の高い男性と低い男性の対比構造は、第Ⅰ部中間部「如月の初午に稲荷に詣りけり」以下、(妹)「何か、目に近ざらん人を、強ひも見給へと、思はん」とて、入

りにけり。」までの段落（「兵衛佐の稲荷詣横恋慕譚」）に投影している。

これらの一致箇所を見渡すと、極めて興味深い共通点があることに、今回気付くことができた。それは、『篁』における語句や表現の諸特徴から本稿執筆者が個人的に考察してきた段落構成の上で、相対的にごく初期の段階で制作されていただろうと推定している部分ではない。段落（部分）にのみ、一致箇所が認められる、という傾向である。なお、現在、初期段階での制作箇所と見なししているのは、おおよそ、次の箇所である。

○第Ⅰ部においては、「如月の初午に稲荷に詣りけり」（兵衛佐の稲荷詣横恋慕譚）の段落以前。

○第Ⅱ部においては、その冒頭「時の右大臣の娘賜へと」から「たゞ童ひとりぞ、具し給ひける。」まで。（いわゆる第Ⅱ部で

「末娘成婚到富譚」に相当する段落）

『伊勢』の三章段と関わるのは、第Ⅰ部・第Ⅱ部各々で、これら以降の段落ということになる。

『篁』の段落の構成の解釈については、機会を改めて詳述したいと考えているが、右のこのことは、『伊勢』から着想を得てそれを組み入れて拡大させるという発想は、必ずしも『篁』の初期（第一次創作時）のものではなかった可能性があることを示唆している。

つまり、『伊勢』は確かに現在の『篁』（現『篁』）の重要な「構想」

の一部となつていているという点では、典拠の一つではあるが、必ずしも原『篁』（「古篁」）の材料とは見なしがたい、ということである。本稿の副題における「一典拠」というのはその範囲の意味である。

## 7 『篁物語』の「緑の衣」と『伊勢物語』の

### 「緑衫ろくせうの上の衣きぬ」

安部（2017）では、『篁』の「緑のきぬ」における「きぬ」の使用の珍しさを（類似表現には「ころも」「そで」等があるが「緑色系の表現+きぬ」は『篁』『伊勢』のみ）、『名義抄』の「袍」の訓読み「うへのきぬ」に由来する可能性があること、「緑袍」の漢語は既に白楽天に使用があることなどを指摘し、漢語「緑袍」の訓読みによる漢文訓読的表現の蓋然性が高い、と解釈した。

今回、『伊勢』からの影響が極めて高いことが見てとれた。「緑のきぬ」は、確かに漢籍や訓読に詳しい原作者・源順を考慮すれば、漢字「袍」の訓「うへのきぬ」も踏まえているであろうが、漢語「緑袍」のほか、この『伊勢』の「緑衫ろくせうの上の衣きぬ」の言い換えである可能性も、考慮する必要があることになる。

## 8 『篁物語』の末尾段落と『伊勢物語』四十段の末尾表現

次に、『伊勢』と共通していた末尾表現の、『篁』構想上における問題を検討しておく。

『篁』の第Ⅱ部の求婚譚部分は、出世して(右大臣の)「三の君」を幸せにした、という結びで一度締めくくられ、その後、次のような三つの文よりなる回顧的終結段落で、結びとなる。

(「いよいよよくなり出でければ、この三君を、また二つなくもてかしづき奉る。」の後に)

(第1文) 今の人、まさに大学のせうを、むこに取る大臣もあらむや。

(第2文) たゞ、心・かたち・才おとり【通釈Ⅱ才を取り】給なるべし。

(第3文) 又、あらじかし、かやうに思ひて、文作る人は。

従来、いかにも取って付けたかのようなこの、大学の学生称揚表現、博士・学生の才や漢学への評価、新旧時代の対比表現、古き良き時代を回顧する表現に対しては、後代における加筆の可能性、さらに、平安後期の時代的背景を投射した視点からの回顧、中世的訓戒的感慨などのような受け取り方もなされてきた。また、成立年代を平安後期以降に下げる材料の一つとして挙げられる箇所でもあつ

た。

この三つの文のうち、後藤氏の考察により、第1文の表現は、『伊勢』を踏まえたものである蓋然性が高いことが明らかになった。もしそうであれば、末尾の回顧的表現のうち、「今の人、まさに大学のせうを、むこに取る大臣もあらむや。」は、第Ⅰ部・第Ⅱ部の(初期構想部分も含めた)主要段落の構成が固まった段階には、既に組み込まれていた表現であつたことになる。

残る解釈上の課題は、右の結語段落の第2文、第3文の位置付けということに絞られる。さらに、『伊勢』の「今・昔対比」末尾のうち「昔の若人」に対応するのが『篁』の「昔の大臣」たゞ心・かたち・才を取り給ふなるべし。」であつたと見た場合には、そのまま『伊勢』との対応範囲ということになり、残るのは最後の一文のみとなる。

すなわち、いずれにせよ、後代に末尾部分に加筆があつたとしても、それは、かなり限定されたものであつたのではないか、ということも新たに覚えてきた視点である。

## 9 むすびとして

本稿では、前稿・安部(2011)で取り上げた「緑の衣」という源順語彙を糸口にして、『伊勢物語』の三つの章段にたどり着き、『篁物語』との関連性を考えてみた。『篁物語』は、少なくともその一

部は、『伊勢物語』の三十九・四十・四十一の章段の影響を受けていると解釈された。

後藤(1936)が指摘したように、四十段との「構想上の一致」という点は、複数の状況設定や語句表現の一致などから見ても、最も明瞭な「構想上の一致」を示していると言えよう。

また、四十一段は、これまで目を向けられてこなかったが、「緑の衣」表現に着目した安部(2011)を踏まえて見てみると、身分の異なる男二名の対比や、何より「六位の緑の衣」という『篁』の構想の骨格にも関わる要素をもつという「構想上の一致」も小さくないと考えた。

三十九段については、『篁』の妹の亡霊譚部分は、既に言われるように、中国文学起源の何らかの亡霊譚をひとつの材料にもしているのではないかと読めるものの、三十九段の源至の和歌がその着想の一つであったと見る解釈は、三つの章段の連続性と祖父の歌説話という点を考慮するならば、少なくとも可能性程度には残しておくように思われる。

さらなる今後の課題としては、『伊勢』と関連する部分の『篁』での配置の問題である。今後、『篁』のそれぞれの部・段落の構成と、それらの形成過程を探る上で、極めて重要な視点として興味深く思っている。

くり返しになるが、『伊勢』四十段末尾表現と、『篁』末尾部分が一致していた。『篁』の末尾の回顧的表現のうち、「今の人、まさに

大学のせうを、むこに取る大臣もあらむや。」は、第Ⅰ部・第Ⅱ部の主要段落の構成が固まった段階において、既に組み込まれていた表現であった蓋然性が高いことになると見なした。従来指摘され、検討されてきた末尾部分の加筆があったとしても、それは——それより更に後の二つの文など——より限定されていた、ということになろうか。

『篁物語』の段落構成とその形成過程については、稿を改めて取り上げることにした。

#### 注

(1) 前稿では、『篁物語』の作者に関する先行研究史は、紙幅の都合上、後日へ送っている。ここでは、源順とみた拙論での解釈に関わるという意味で重要でもある次の指摘を、まずは挙げておくことにする。もっとも早く、それに近い読み取りをした説として、『篁』を新たに世に紹介した後藤丹治(1927)の次の言及を紹介しておきたい。

「この日記は我々に、宇津保物語か落窪物語かを読むと同じ感じを与へる。」(後藤丹治(1927))

後藤氏は、源順の名は、この後の後藤丹治(1936)でも挙げてはいない。しかし、今日、『宇津保物語』と『落窪物語』の作者として最も有力視され、あるいは、最も主たる原作者と見なされているのは、源順である。後藤氏は、後藤丹治(1936)になると、成立年代については、これら2作品よりも後である可能性にも言及し、その解釈にはゆれが生じてしまっている。しかし、初期におけるその感性には注目しておきたい。

『篁物語』原作・源順説を、その後の研究史をたどって整理しまとめたとしても、結局、『篁』発掘者である後藤丹治氏のこの言及が近代研究としては、間接的ながらも、最も早い最初の言及であるという点は動かないであろう。作者説の研究史はしばしば後日を期す代わりに、右の点を報告しておく。

(2) 緑と紫による身分の対比は『源氏物語』の夕霧をめぐる場合でも見られる(前稿・安部(2017))。

【参考文献】

- 後藤丹治(1927)『新たに知られた小野篁日記』『国語と国文学』5—12  
 藤田徳太郎(1930)『平安朝物語選要』明治書院  
 後藤丹治(1936)『篁物語新考』『国語国文』6—10  
 藤田徳太郎(1941)『平安時代物語選要』明治書院(藤田(1930)の改修版)  
 神野藤昭夫(1972.03)『源順伝』断章——その家系を繞つて——『古代研究』2  
 安部清哉(1996.03)『語彙・語法史から見る資料——『篁物語』の成立時期をめぐるつ——』『国語学』184  
 安部清哉(2009.03)『篁物語』承空本(「小野篁集」)に関する研究課題』『人文』7  
 安部清哉(2010.01)『篁物語』の井野葉子氏『源氏物語』浮舟巻での引用』説補強ならびに祖形小考』『古典語研究の焦点』、平成22、武蔵野書院  
 安部清哉(2014)『篁物語』佐藤・前田編『日本語大事典』、平成26、朝倉書店(項目執筆)  
 安部清哉(2017.03)『原『篁物語』の作者・成立年と源順および河原院歌壇沈淪歌人群の長歌・和歌——九六一年から九八〇年頃か——』『文学部研究年報』63(学習院大学)、pp.51-97。

安部清哉(2010.06)『係り助詞(ナム・ゾ・コン)の四文体別変遷史から見た『篁物語』——源順原作説と照らしつつ——』『国語と国文学』95—6(校正中)  
 安部清哉(2018)『予定稿』『篁物語』の構成と形成

【資料・『伊勢物語』】比較のため、『伊勢物語』の三十九・四十・四十一段を掲載しておく(日本古典文学大系により、その頁・行番号を付す。『篁物語』と特に関連する箇所は傍線を付す。)

○三十九段

- P133L12. むかし、西院の帝と申すみかどおはしましけり。その帝のみこたかい子と申すいまそがりけり。そのみこうせ給て、おほん葬の夜、その宮の隣なりけりとおとこ、御葬見むとて、女車にあひ乗りて出でたりけり。いと久しう率て出でたてまつらず。うち泣きてやみぬべかりけるあひだに、天の下の色好み、源の至といふ人、これも物見るに、このくるまを女車と見て、寄り来てとかくなまめくあひだに、かの至、ほたるをとりにて女の車に入れたりけるを、車なりける人、この螢のともす火にや見ゆらん、ともし消ちなむずると、乗れるおとこのよめる。  
 P133L15. 出でていなば限りなるべみともし消ち年へぬるか泣く  
 P133L16. 聲を聞け

P134L5 かの至、返し、

P134L6 いとあはれ泣くぞ聞ゆるともし消ち消ゆる物とも我は知らずな

P134L7 天の下の色好み之歌にては猶ぞありける。

P134L8 至は順が祖父也。みこの本意なし。

○四十段

P134L11 むかし、わかきおとこ、異しうはあらぬ女を思ひけり。さかしらする親あり

P134L12 て、思ひもぞつくどて、この女をほかへをひやらむとす。さこそいへ、まだを

P134L13 いやらず。人の子なれば、まだ心いきおひなかりければ、とむむるいきおひな

P134L14 し。女も卑しければ、すまふ力なし。さるあひだに、思ひはいやまさりにまさ

P134L15 る。俄に親この女ををひうつ。おとこ、血の涙をながせども、とむむるよしな

P134L16 し。率て出でて去ぬ。おとこ、泣くくよめる。

P135L1 出でていなば誰か別の難からんありしにまさる今日はかなしも

P135L2 とよみて絶えいりにけり。親あはてにけり。猶思ひてこそいひしか、いとかく

P135L3 しもあらじと思ふに、眞實に絶えいりにければ、まどひて願たてけり。今日の

P135L4 入相許に絶えいりて、又の日の戌の時ばかりになんからうじていき出でたり

P135L5 ける。昔の若人は、さるすける物思ひをなんしける。今の翁、

まざにしなむや。

○四十一段

P135L8 昔、女はらから二人ありけり。一人はいやしきおとこの貧しき一人はあて

P135L9 なるおとこもたりけり。いやしきおとこもたる、しはすのつゝもりに、うへの

P135L10 きぬを洗ひて、手づから張りけり。心ざしはいたしけれど、さるいやしきわざ

P135L11 もならはざりければ、うへのきぬの肩を張り破りてけり。せむ方もなくて、た

P135L12 ゝ泣きに泣きけり。これをかの貴なるおとこき、て、いと心ぐるしかりけれ

P135L13 ば、いとよらなる緑衫のうへのきぬを見出でてやるとて、紫の色こき時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける

P135L14 武藏野の心なるべし。

【補記一】『伊勢物語』との関連についての『篁物語』の研究史

かつて、というにはなお昔。第二次大戦以前、いまから90年近く前の1930年。平安文学研究者の藤田徳太郎氏は、当時後藤丹治氏によって見出されたばかりであった『篁物語』(後藤(1927)「新たに知られた小野篁日記」『国語と国文学』5(12))に、早くもごく簡略な注を添えた。そして、その末尾の語句が、『伊勢物語』四十段の、やはり末尾の表現に近似することを、頭注でさりげなく指摘した(藤田『平安朝物語撰要』(1930)、その改修版は藤田(1941))。

その後ほどなき1936年、『篁物語』を世に紹介した後藤丹治氏が藤田氏の注記に気付き、『伊勢物語』四十段末尾だけではなく、四十段

の実子恋愛妨害譚全体が、『篁物語』において、妹と兄・篁の恋を母親が妨害する部分に酷似すること、そして、「両書の交渉を推定することが出来る」ことを指摘した(後藤(1986)「篁物語新考」『国語国文』9(10)。これももう80年以上前のことになる。

その後、この2つの指摘は、研究史の初期の業績というだけで研究史の中に埋没していき、ほぼ顧みられることがなくなった。

2017年、安部は、『篁物語』のキーワードである「緑の衣」を調査した過程で、『伊勢物語』の「緑衫の上の衣」(四十一段)の語句とその持ち主である六位の男性が、『篁』の原作者・源順と関連性があること、また、その前の三十九段が源順の祖父・源至の歌説話であって、共に『篁物語』の内容に関連性があると見たところから、間に挟まれた四十段をも源順は参照し、前後二つの章段と同様に影響を受けただろうと推察するに至った。その推論の過程で、上記の二つの研究論文までたどり着くこととなった。

本稿は、『伊勢物語』のこれら三つの章段と『篁物語』との関連性を考察し、これら三章段に関係する部分は、すべて『篁物語』の「原篁」(仮称「古篁」)部分ではないと考えられる範囲にのみ現れることをも併せて言及したものである(詳しくは別稿の予定)。

【補記2】 Episode II (エピソード2) … 小論の内容をわかりやすく謂わば物語風に紹介した付録。

「……それはかつて私が、『後撰和歌集』の編纂作業にも携わっている関係から、『伊勢物語』を読み直していた時に遡ります。『伊勢物語』の四十一段に、かつての私と同じような、六位の身分の男性とその緑の朝衣のことがエピソードになっているところに心とまったのでありました。

私は、ある時期、散位が長く続き、栄進が遅れていたことに鬱々とし、

また、そのことを、あちらこちらで和歌や漢詩にも記していたものでした。そのため、四十一段で、その六位の男と付き合っている女が、ただでさえ恥ずかしい思いも添う緑の官位を、年末に、新年の前にと洗濯した時、慣れぬ洗いばりであつかり破いてしまったという情景があまりに切なく、それを「緑衫の上の衣」と表現していることが、忘れられませんでした。

その章段では、六位の男そのものは登場していませんが、一方、その女の女同胞の恋人が、対照的に「貴なる男」と表現される身分の高い男として登場していました。四十一段唯一の和歌は、そちらの男の方が詠んでいるものですから、当然、章段の主人公はその「貴なる男」なのでした。加えて、その身分の高い方の男性は、女友達の縁という事で、破った衣の代わりに別の衣を恵んでもらうわけですから、惨めなる思いもひとしお身につまされるといってもいいです。私は、自分と同類の六位の男の方に、歌も詠ませて彼を主人公にした歌説話を作ってやりたいという思いがわいてきたのでした。その四十一段の男を我が事のように感じたわけです。

そのように自分に引き付けて考えてしまったのは、ちょうど直ぐ前々段の三十九段が、祖父・源至を主人公としていて、祖父が詠んだ和歌が評されていたからかもしれません。私は祖父を直接は知りませんが、三十九段では、死んだ女性なのに、まだその魂は死んだとは思っていないとして、「消ゆる物とも我は知らずな」と詠み返したそのロマンチックな感性に魅かれました。死んでも魂はまだ生きている女性。そういう話を歌説話に組み込んでみたい、と思ったものでした。

三十九段が祖父の話、四十一段が自分のことに類似しているとなると、中間の四十段がちよっと気になります。父の源季に関わるような話ということはないか、そう思って読んでみたのですが、残念ながら関連



は見出せませんでした。そのように何かを探し出そうと思って深読みしてしまつたせいか、登場する子供の恋愛を両親が妨害する話、即ち「美子恋愛妨害譚」として、とても良く出来た話と思われました。三十九段、四十一段に挟まれているので、この四十段の要素も生かして、三十九段、四十一段の要素とも絡めた物語を作つてみたいという思いを抱いたのでした。子供が男子では面白みに欠けるので、男女を入れ替え、娘に男が言い寄つてくるので二人を引き離す話にして「継子苛め譚」風に脚色し、娘が死ぬ話に作り替え、三十九段の要素を借りて、その娘の亡霊が死んでも残るといふ展開にすれば、面白いだろうと考えたのでした。(結局この四十段からは、「さかしらする親あり」「人の子なれば、まだ心いきおひなかりければ、とゞむるいきおひなし。女も卑しければ、すまふ力なし。」「絶えいりにけり。親あはてにけり。」「眞實に絶えいりにければ、まどひて願たてけり。今日の入相許に絶えいりて、」「昔の若人は、さるすける物思ひをなんしける。今の翁、まさにしなむや。」などの設定を、オマージュとして組み入れさせていただくことにしたのでした。)

『伊勢』の四十段の最後の言葉「昔の若人は、さるすける物思ひをなんしける。今の翁、まさにしなむや。」は、物語全体の結びの言葉にアレンジして残すこととしました。

娘が死ぬことに変えたので、三十九段の祖父の和歌にあった「体は死んでも、女の魂は人の心に残る」というコンセプトをそこに繋いで、娘の魂はしばらく思いを寄せた人の所に留まるといふように、作り替えて繋ぎました。ですので、娘の亡霊譚とも呼ばれる部分は、そこを少し大きく膨らませただけのものでしたし、もとより中国文学の亡霊譚の話も伝わっていましたので、決して後代でないと発想し得ないような話というものではありません。

四十一段の六位の男性は、我が身の事のようにでしたが、娘の恋人役と

いうことになりました。六位の緑の官位に関わる歌も、娘の恋人役である男の方に詠ませることで、組み込むことにしました。六位の男と対照的な、身分の高い男をどこに組み込むかは、迷いましたが、『伊勢物語』のように仲の良い近い関係としてではなく、恋敵として登場させる方が身分の対比が際立つて話が膨らむので、中心的話とは異なる脇筋の展開にし、「横恋慕する高貴な男」という設定にしてみました。

第一部での柑橘類を身内に食べさせようと持ち帰る話、第二部で、三人娘の末っ子が嫁ぐという設定や(仁平道明氏)、その三女との新枕の夜の篁との押し問答(中村祥子氏)、ほかは、既に指摘されているように、中国文学から借用しました。

なお、第二部冒頭の設定、時の大臣に漢詩を直訴して取りたててもらふという設定のことですか。これは、私の私家集ほかに書いていますが、私自身も申文を提出して任官を請うということを実行しています。同じ漢文提出でも、任官ではなく娘との婚姻を請うという話に置き直しただけということにすぎません。漢詩や申文に任官を願つたり、散位をかこつたりするのは、既に私が私家集や他の所にも書いている通りです。位や出世のために謂わば直訴することは、自分の実体験を踏まえているわけですが、自分のことというよりも、それは当時としてはさほど特別なことでもなかったし……。

これで、お分かりいただけたように、『篁物語』は、当初作成していた「古篁物語」の部分があらまし出来上がった後で、それをどのように敷衍させて膨らませていこうかと考えていた時に、その材料の一つとして、『伊勢物語』の祖父の章段などの三つの章段が着想のよい刺激となつて、ヒントを得たというものだったのでした。結びの詞などは明瞭に借用しておりますから、ヒントという以上だったかもしれませんが……。

\*\*\*\*\*以上、安部

## ENGLISH SUMMARY

## On Chapters 39, 40, and 41 of Tales of Ise

(Use Monogatari 『伊勢物語』) as one of the source materials  
for the Tale of Takamura (Takamura Monogatari 『鞆物語』)

ABE Seiya

In this thesis, I consider the notion that Chapters 39, 40, and 41 of Tales of Ise (Use Monogatari 『伊勢物語』) are used as part of the source materials and the concept for Tales of Takamura (Takamura Monogatari 『鞆物語』). I point out many similarities between the contents of these chapters and the composition, expressions, and phrases in Tales of Takamura.

Chapter 41 is a tale related to Shitagou Minamoto-no himself, the original author of the Tales of Takamura. One of men who appears in chapter 41 is very similar to the hero of the Tale of Takamura and Shitagou Minamoto-no himself, the original author of the Tale of Takamura. Chapter 39 is a Waka tale (Waka Monogatari) about one of Shitagou's grandfathers. Therefore, I assume that part of the story of Chapter 39 and 41 was incorporated into his work.

In previous studies, Gotoh (1936) pointed out a similarity between a part of Chapter 40 and the Tales of Takamura. I reveal another feature common to both. However, Chapter 40 has nothing to do with Shitagou himself completely. It is necessary to think about the reason why Shitagou has used it for his work.

There were 40 chapters between 39 chapters and 41 chapters related to him, so Shitagou who read 40 chapters seems to have gained inspiration from continuity with these three chapters. Therefore, it is estimated that 40 chapters were incorporated into the material of their work.

For these reason, it can be estimated that Shitagou used these three consecutive chapters of Ise Monogatari for the creation of his work, Takamura Monogatari.

*Key Words:* Ise Monogatari, Takamura Monogatari, Shitagou Minamoto-no, source material